

小学校教師による自主的な学習会の意義と課題

－特別活動の学習会に関するウェブ調査の検討－

長 谷 川 祐 介* 藤 村 晃 成**

(令和7年1月23日受理)

【要 旨】 日本の教師文化の一側面を明らかにする上で、教員研修の1つとみなされる勤務時間外に行われる教師による学習会を対象にした研究に取り組むことは重要である。そこで、特別活動に関する学習会に参加した経験のある小学校教師を対象にしたウェブ調査のデータ分析を行った。分析結果から、小学校特別活動に関する教師による自主的な学習会は、教師にとっての職能開発の機会だけではなく、特別活動に関する教師ネットワークへの参入機会、そして、頻繁に参加する者にとって自身の教職生活全般を充実させる機会という意義が見出された。ただし自主的な学習会の課題として、女性参加を制限する教師文化が存在していることを示唆する結果も示された。今後の研究可能性として、学習会の内部過程、学習会を基点とした教師ネットワーク、個々の教師による経験・意味づけに着目した研究の3点について論じた。

I 問題の所在

研究と修養に励むことが求められている学校の教師¹⁾は、研修を受ける機会が法的に保障されている。教育公務員特例法第22条に基づき、教員研修の制度が設けられている。

そもそも教員研修とはどういったものなのか。教員研修の形態には次の3つがある(黒田2019)。第1は職務研修(職務命令により参加する研修)、第2は職専免研修(教育公務員特例法第22条第2項に基づく研修で、授業に支障のない限り、本属長の承認を受けて、勤務場所を離れて受ける研修)、第3は自主的な研修(勤務時間外の研修)である。

さらに教員研修の実施主体は、大きく4つに分類される²⁾。第1は、実施主体が国の研修である。教職員支援機構等で開催され、その内容は校長研修、副校長・教頭等研修などがある。第2は、実施主体が教育委員会の研修である。教育センター等で開催され、その内容は初任者いる学校で開催される、いわゆる校内研修(学校の研究テーマや各教科などの授業研究など)研修、中堅教諭等資質向上研修などがある。第3は、実施主体が学校の研修である。勤務して

*はせがわゆうすけ 大分大学教育学部学校教育講座

**ふじむらこうせい 大分大学大学院教育学研究科教職開発専攻

がある。そして第4は、実施主体が教員の研修である。主に勤務校以外で開催され、参加者の興味関心に基づき、各教科や学級経営、生徒指導等に関する内容が取り扱われる。

教員研修に関する調査も行われている。教師対象の重要な調査として、大規模な国際調査である OECD 国際教員指導環境調査 (Teaching and Learning International Survey: TALIS) がある。TALIS では、教員研修に関わる内容である職能開発について項目設定がなされている。2018 年実施の第3回調査 (TALIS2018) では、日本の教師は他国と比べて職能開発の必要性を高く感じ、「学校の公式な取組である同僚の観察・助言又は自己観察、コーチング活動」など教員研修に関連する活動に積極的に参加していた (国立教育政策研究所編 2019)。

本稿は、勤務時間外に行われる教師による自主的な学習会³⁾に着目する。これは教員研修の形態としては自主的な研修、実施主体は教師、そして場所や時間は、勤務時間外の時間を中心に学校外で開催される研修会として位置づけられるものである。日本では戦後、民間教育研究団体とよばれる教師による自主的な研究・研修集団が結成され、教科等別に指導法に関して盛んに自主的な研修が行われてきた。それは、日本の教師がインフォーマルに培ってきた専門的文化 (佐藤 1997) の1つである。その後、民間教育研究運動を支えてきた教師の退職等により団体維持が困難な状況に見舞われるケースもあったが、2000 年代以降はサークルなどの形で、これまでとは異なる教師による自主的な研究・研修集団の活動が行われている (佐藤 2005)。こうした歴史的経緯を踏まえると、現在の日本の教師文化の一側面を明らかにする上で、勤務時間外に行われる教師による学習会を対象にした研究に取り組むことは改めて重要だろう。

さらに本稿では、小学校特別活動に関する教師による学習会を事例として取り上げる。その理由は他のカリキュラムと比べて、特別活動は教員研修の対象と見なされていない可能性があるからである。たとえば TALIS2018 の日本調査では、教員研修や授業等に関する質問において、研修等内容の選択肢が設けられている。その選択肢は教科等別に設定されているのだが、特別活動は選択肢にはなかった⁴⁾。少なくとも職務研修、職専免研修における特別活動に対する関心はあまり高いものとはいえないだろう。小学校特別活動の学習会を取り上げることは、これまで等閑視されてきた特別活動に関する教師の学習の実態を明らかにすることができるのではないだろうか。

先行研究においては、教師による自主的な研究・研修集団について教育方法学が研究をすすめてきた。ところが日本教育方法学会編 (2009) などを見ると、教科の授業づくりや学級集団づくりに関する研究・研修集団は対象にされているようだが、特別活動については先行研究において対象とされてこなかった。

そこで今回、特別活動に関する学習会に参加した経験のある小学校教師を対象に、特別活動の学習会に関するウェブ調査を実施した。この調査データの分析を通じて、小学校特別活動に関する教師による自主的な学習会の意義と課題を検討し、今後の研究可能性について考察する。

II 方法

分析に用いる調査データは、特別活動に関する学習会に参加した経験のある小学校教師を対象に実施した「特別活動の学習会に関するウェブ調査」(研究代表者: 長谷川祐介) である。この調査は勤務時間以外に開催される特別活動の学習会への参加状況や効用等を明らかにするこ

とを目的としたもので、アンケート作成ツールである Google フォームを用いて実施したウェブ調査である。

今回の調査目的を達成するためには、特別活動に関する学習会への参加経験を有する小学校教師はもちろんのこと、参加経験が無い小学校教師も含めて、小学校教師全体を母集団として設定した上で実査することが望ましい。その場合、小学校教師全体に対し、特別活動に対する関心の程度に関係なくランダムに回答フォームを送信することが必要となる。だが今回は、それを実現するための条件等を整備することが時間的にも費用的にも困難と判断した。

他方、研究代表者はこれまで各地域で開催されているいくつかの特別活動に関する学習会に参加した経験があり、それら学習会のメンバーが中心となって作成しているコミュニケーションアプリである LINE で作成されたグループ LINE のメンバーになっていた。研究代表者が参加している特別活動の学習会に関するグループ LINE のうち、数個は 100 名以上を越しているものもあった。こうしたことから研究代表者は LINE を通じて特別活動に関心のある多くの小学校教師にアクセスできる状況にあった。

そこで実査可能性を踏まえ、「特別活動に関する学習会に参加した経験のある小学校教師」を母集団としてウェブ調査を実施することとした。今回のウェブ調査はスノーボールサンプリングにより、データ収集を行うこととした。調査代表者の知人である小学校教師や、調査代表者が参加している各地の小学校教師が中心となっている特別活動に関する学習会のグループ LINE に対してメッセージを送り、調査依頼を行った。同時に、回答者の知人に対して、調査協力のメッセージや調査回答依頼文書を転送してもらうこともあわせて依頼した。調査対象者はスマートフォンやパソコンを用いて、LINE のメッセージ上の文面に掲載された調査回答用の URL や、同時に送信した調査依頼文書に記載されていた二次元コードから調査票が記載されているウェブページにアクセスし、そこから調査回答を行った。なお調査では、だれが回答したかどうか、調査者側から特定できないようにするために、回答者名や学校名など、回答者個人を特定できる質問項目は設定しなかった。

調査実施前に、大分大学教育学部研究倫理審査委員会に倫理審査申請を行い、調査倫理上問題がないことの承認を得た（承認番号：教研承 R5-009）。その後、調査を行った。回答期間は 2024 年 2 月から 3 月と設定した。

回答締切後、データクリーニング作業を行った。まず、想定する母集団（特別活動に関する学習会に参加した経験のある小学校教師）を踏まえ、勤務校として小学校以外を選択した者をデータから除外することとした。その結果、107 名（勤務校として小学校と回答した者）となった。その上で、特別活動に関する学習会に参加した経験のある小学校教師を分析対象者としてすることとした。今回のウェブ調査では、特別活動の学習会について「勤務校や行政による研修ではなく、学校教員が自主的に開催している特別活動の実践を学ぶ学習会のこと」と説明した上で、調査対象者に「あなたは現在、特別活動の学習会にどの程度、参加していますか？もっともあてはまるものを 1 つ選んで下さい。」という質問への回答を求めた。その結果、107 名中 12 名が「1 度も参加したことがない」と回答していた。この 12 名は、特別活動に関する学習会に参加した経験がない小学校教師であり、想定する母集団に含まれないことから、分析対象から除外することとした。以上を踏まえ最終的に、分析対象者は 95 名となった⁵⁾。

Ⅲ 結果

1 特別活動の学習会に参加した経験のある教師の属性

表1は調査対象者に「あなたは現在、特別活動の学習会にどの程度、参加していますか？もっともあてはまるものを1つ選んで下さい。」という質問に対して、「1度も参加したことがない」以外の選択を回答した者、すなわち「数年に1回程度」から「年に13回以上」の間のいずれの頻度で参加経験がある者の属性（性別、年齢、教員経験年数、職階、学級担任経験）の回答結果である。

まず性別についてである。特別活動の学習会に参加した経験のある教師の性別をみると、「女」が48.4%であった。小学校に勤務する教師は女性が多いことで知られている。事実、2023年度学校基本調査によれば、全国の小学校の本務教員のうち、女性の割合は62.6%であった⁶⁾。このことから特別活動の学習会の参加者は、小学校教師全体と比較すると、やや女性の割合が高いことがうかがえる。

続いて年齢についてである。特別活動の学習会に参加した経験のある教師の年齢をみると、「29歳以下」が最も割合が高く31.6%であった。続いて「30～39歳」で27.4%、「40～49歳」が26.3%となっていた。最も少なかったのが「50歳以上」で14.7%となっていた。参加した経験のある教師の年齢（年代）には極端な偏りはなかったが、若干、若年層（主に20代）の割合が高かった。さらに教員経験年数についてみてみたい。「教員になって1年目～3年目」（12.6%）、「教員になって4年目～6年目」（16.8%）、「教員になって4年目～6年目」（12.6%）となっていた。これら合計、すなわち「教員になって1年目～9年目」は、42.1%となった。次いで「教員になって10年目～20年目」が31.6%であった。令和4年度（2022年度）学校教員統計調査によれば、全国の小学校教員の勤務年数について、5年未満と5年以上10年未満の割合の合計が39.4%、5年未満と5年以上10年未満の割合の合計が26.6%であった⁷⁾。全国的に勤務経験年数が少ない教員の割合が高い傾向にあるが、特別活動の学習会の参加者も同様に勤務経験年数が少ない者の割合が高かった。

さらに職階をみると、教諭の割合が最も高く78.9%であった。全国的な状況との違いを確認するため、性別と同じく2023年度学校基本調査の結果をみると、全国の小学校の本務教員のうち教諭の割合は74.9%であった⁸⁾。若干の違いはあるものの、特別活動の学習会に参加した経験のある教師は全国的な状況同様、約4分の3が教諭であった。

最後に学級担任の経験についてもみてみたい。調査時点の状況であるが、「現在、学級担任をしている」の割合が75.8%であった。特別活動は学級経営と強く関連するカリキュラムであることから、現在、学級担任をしている者が多く参加している傾向にあると予想されたが、現在、学級担任をしていない者も24.2%と約4分の1を占めていた。ただし、現在学級担任をするものの大半が教諭であること、そして先ほど確認した職階における教諭の割合が約4分の3であったことから、現在の学級担任の状況は職階の割合をある程度、反映した結果であったといえるだろう。

以上から、属性という点からみてみたとき、特別活動の学習会に参加した経験のある小学校教師は教員経験年数や職階などは全国的な状況と大きな違いはなかった。特別活動の学習会参加経験者も教員経験が短い者や教諭が中心であった。ただし性別については全国的な状況とは

やや異なる傾向にあった。小学校教師は女性割合が約 6 割と高い傾向にあるが、今回の調査結果からは、特別活動の学習会参加経験者は男女ともに 5 割程度であった。女性の割合が極端に小さいわけではないが、小学校教師全体の状況と比べるとやや男性の割合が高かった。

表 1 特別活動の学習会参加経験者（小学校教師）の属性

性別	N	%	職階	N	%
女	46	48.4%	校長	3	3.2%
男	49	51.6%	副校長もしくは教頭	8	8.4%
合計	95	100.0%	主幹教諭，指導教諭，主任教諭	9	9.5%
			教諭	75	78.9%
			合計	95	100.0%
年齢	N	%	学級担任	N	%
29歳以下	30	31.6%	現在，学級担任をしている	72	75.8%
30～39歳	26	27.4%	現在，学級担任はしていない	23	24.2%
40～49歳	25	26.3%	合計	95	100.0%
50歳以上	14	14.7%			
合計	95	100.0%			
教員経験年数	N	%			
教員になって1年目～3年目	12	12.6%			
教員になって4年目～6年目	16	16.8%			
教員になって7年目～9年目	12	12.6%			
教員になって10年目～20年目	30	31.6%			
教員になって21年目～30年目	15	15.8%			
教員になって31年目～40年目	10	10.5%			
合計	95	100.0%			

2 特別活動の学習会の参加頻度

表 2 は調査対象者に「あなたは現在，特別活動の学習会にどの程度，参加していますか？ もっともあてはまるものを 1 つ選んで下さい。」という質問の回答結果である。なお先述の通り，「1 度も参加したことがない」を選択した者は分析対象から除外している。

表 2 特別活動の学習会の参加頻度

あなたは現在，特別活動の学習会にどの程度，参加していますか？

	N	%
数年に1回程度	6	6.3%
年に1回～3回程度	19	20.0%
年に4回～6回程度	18	18.9%
年に7回～9回程度	15	15.8%
年に10回～12回程度	12	12.6%
年に13回以上	25	26.3%
合計	95	100.0%

最も多かったのが，「年に 13 回以上」で 26.3%であった。年に 13 回以上となると，毎月 1 回以上，参加していることとなる。学校現場の多忙化が社会問題化しているにもかかわらず，特別活動の学習会参加経験者の約 4 分の 1 が，頻繁に学習会に参加していた。ただし 2 番目に割合が高かったのは「年に 1 回～3 回程度」で 20.0%，3 番目は「年に 4 回～6 回程度」で 18.9%，4 番目は「年に 7 回～9 回程度」で 15.8%，5 番目は「年に 10 回～12 回程度」で 12.6%であった。特別活動の学習会に参加した経験のある小学校教師は，参加頻度が月 1 回以上とい

う積極的参加者が約4分の1を占めており、その他の約4分の3が程度の違いはあれ年に数回程度の者たちであった。

次に、参加頻度により特別活動の学習会に参加した経験のある小学校教師の属性に違いがあるかどうかを検討した。ただし今回の調査データは全体のサンプルサイズが決して大きくない。そこで表2で示した参加頻度を「数年に1回程度～年3回程度」(N=25, 全体の26.3%), 「年に4回～12回程度」(N=45, 全体の47.4%), 「年に13回以上」(N=25, 全体の26.3%)の3つに再カテゴリー化した。

表3は参加頻度と特別活動の学習会参加経験者(小学校教師)の属性のクロス集計結果である。カイ二乗検定を行った結果、特別活動の学習会参加頻度と有意差があったのは、性別($p<0.05$)と教員経験年数($p<0.05$)であった。

性別については、女性は男性より全体的に参加頻度が低い傾向にあった。年13回以上と頻繁に参加している小学校教師は、男性の32.7%であったが、女性だと19.6%に留まっていた。先ほど学校基本調査の結果と比較したとき、特別活動参加経験者全体に占める女性割合が低いことを指摘したが、特別活動の学習会について同じ参加経験者の中でも女性は頻繁に参加する

表3 参加頻度別にみた特別活動の学習会参加経験者(小学校教師)の属性
(クロス集計結果)

		数年に1回程度 ～年3回程度	年に4回～12回 程度	年に13回以上	合計
性別	女	39.1%	41.3%	19.6%	100.0%
	男	14.3%	53.1%	32.7%	100.0%

		数年に1回程度 ～年3回程度	年に4回～12回 程度	年に13回以上	合計
年齢	29歳以下	23.3%	63.3%	13.3%	100.0%
	30～39歳	34.6%	38.5%	26.9%	100.0%
	40～49歳	32.0%	40.0%	28.0%	100.0%
	50歳以上	7.1%	42.9%	50.0%	100.0%

		数年に1回程度 ～年3回程度	年に4回～12回 程度	年に13回以上	合計
教員経験年数	教員になって1年目～3年目	25.0%	66.7%	8.3%	100.0%
	教員になって4年目～6年目	25.0%	56.3%	18.8%	100.0%
	教員になって7年目～9年目	25.0%	66.7%	8.3%	100.0%
	教員になって10年目～20年目	33.3%	33.3%	33.3%	100.0%
	教員になって21年目～30年目	33.3%	46.7%	20.0%	100.0%
	教員になって31年目～40年目	0.0%	30.0%	70.0%	100.0%

		数年に1回程度 ～年3回程度	年に4回～12回 程度	年に13回以上	合計
職階	校長	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
	副校長もしくは教頭	25.0%	50.0%	25.0%	100.0%
	主幹教諭, 指導教諭, 主任教諭	33.3%	44.4%	22.2%	100.0%
	教諭	26.7%	49.3%	24.0%	100.0%

		数年に1回程度 ～年3回程度	年に4回～12回 程度	年に13回以上	合計
学級担任	現在, 学級担任をしている	30.6%	47.2%	22.2%	100.0%
	現在, 学級担任はしていない	13.0%	47.8%	39.1%	100.0%

*** $p<0.001$, ** $p<0.01$, * $p<0.05$.

ことが難しい状況があることが推察される。教員経験年数については、経験年数が9年以下の者と比べて、10年目以上の者の参加頻度が高い傾向にあった。たとえば年13回以上参加している者の割合が10年目以上となると、おおむね20%以上となっていたが、9年目以下は20%に至っていなかった。

3 特別活動の学習会に参加することの効用

続いて特別活動の学習会に参加することの効用について検討した。その前に、参加経験者が特別活動の学習会に参加するきっかけが何だったのか、みてみたい。特別活動の学習会に参加するきっかけについて今回のウェブ調査では、「はじめて特別活動の学習会に参加したきっかけとして、次の項目はあてはまりますか？」という質問を設定し、回答者に対して表4で示す①から⑥についてあてはまるものすべてを選択することを求めた。データ収集後、①から⑥それぞれについて全体(95名)に占める「あてはまる」を選択した者の割合を算出した結果である。表4は「あてはまる」の割合が高い項目から順に並べた結果を示している。

全項目において半数以上の割合を越えるものはなかったことから、同じ参加経験者でも、参加のきっかけは様々であることがうかがえる。その中でも「②以前、勤務校で同僚だった先生に誘われて参加した」「⑤学習会の案内をみて参加した」の「あてはまる」の割合が47.0%であった。学習会の案内はチラシや最近であればLINEなどSNS等を通じたものが想定され、そうしたものを何かしらのきっかけで目にし、参加したと考えられる。だがそれだけではなく、勤務校で同僚からの誘いが重要なきっかけになっていたことから、教師のネットワークとして勤務校内の同僚関係が、勤務校外の学習会参加において一定の役割を担っていることが推察される。

特別活動の学習会に参加するきっかけは参加頻度と関連するかもしれない。そこで表4の①から⑥の項目と参加頻度についてクロス集計をした。だが、分析の結果、5%水準で有意な項目はなかった。少なくとも今回の調査データからは参加頻度は、勤務校内のネットワークを通じて誘いなどというような参加のきっかけと関連はなかった。

表4 特別活動の学習会に参加するきっかけ

「あてはまる」を選択した者の割合		
②以前、勤務校で同僚だった先生に誘われて参加した		47.0%
⑤学習会の案内をみて参加した		47.0%
④友人に誘われて参加した		36.8%
①現在の勤務校で同僚の先生に誘われて参加した		24.0%
⑥その他		16.0%
③大学の研究者に誘われて参加した		8.0%
有効回答者95名		

参加経験者は、特別活動の学習会に参加した経験をどのように捉えていたのだろうか。参加経験者は特別活動の学習会参加経験にどのような効用を得ていたのか、さらに、学習会参加経験の効用が、参加頻度によって違いがあるのか検討した。なお学習会参加経験の効用について、ウェブ調査では、「あなたは特別活動の学習会に参加したことにより、次の項目はどの程度あてはまりますか？」という質問に対し、表5にある①から⑧それぞれについて「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた。表5は参加頻度を独立変数、

特別活動の学習会参加経験に対する効用を従属変数とした一元配置分散分析の結果である。

参加頻度による違いをみる前に、特別活動の学習会参加経験の効用の項目の全体的な回答結果を確認したい。表5にある①から⑧それぞれの「合計」は、参加頻度に関係なく特別活動の学習会の参加経験者全体の回答結果が示されている。①から⑧それぞれの「合計」の平均値をみると、「②特別活動に関する実践の具体的な方法を学ぶことが出来た」の平均値が4.78と他の項目と比べて高い数値であったことである。学習会の目的を考えれば首肯できる結果であろう。その点を踏まえた上で注目すべきは、「③特別活動を大切にする教師と出会うことが出来た」の平均値が4.89と他の項目と比較して最も高い値であったことである。特別活動の学習会は実践知の学習機会となっていることだけではなく、それと同等以上に特別活動というカリキュラムに関心を持つ教師同士のつながり、ネットワーク形成の機会となっていると参加経験者が捉えていたのである。

表5 参加頻度別にみた特別活動の学習会参加経験の効用
(一元配置分散分析の結果)

		N	Mean	SD	p	η^2
①特別活動に関する理論を学ぶことが出来た	数年に1回程度～年3回程度	25	4.28	0.61		0.035
	年に4回～12回程度	45	4.53	0.59		
	年に13回以上	24	4.58	0.78		
	合計	94	4.48	0.65		
②特別活動に関する実践の具体的な方法を学ぶことが出来た	数年に1回程度～年3回程度	25	4.68	0.48		0.061
	年に4回～12回程度	45	4.73	0.50		
	年に13回以上	24	4.96	0.20		
	合計	94	4.78	0.44		
③特別活動を大切にする教師と出会うことが出来た	数年に1回程度～年3回程度	25	4.80	0.50		0.046
	年に4回～12回程度	44	4.89	0.32		
	年に13回以上	25	5.00	0.00		
	合計	94	4.89	0.34		
④特別活動の実践に関する悩みを聞いてもらえた	数年に1回程度～年3回程度	25	4.12	0.97	***	0.141
	年に4回～12回程度	44	4.55	0.63		
	年に13回以上	25	4.88	0.44		
	合計	94	4.52	0.74		
⑤特別活動のすぐれた実践を紹介してもらえた	数年に1回程度～年3回程度	25	4.52	0.65		0.056
	年に4回～12回程度	45	4.73	0.58		
	年に13回以上	25	4.88	0.33		
	合計	95	4.72	0.56		
⑥特別活動に限らず、教職生活に関わることで話をする事が出来る教師と出会えた	数年に1回程度～年3回程度	25	3.88	0.93	***	0.232
	年に4回～12回程度	45	4.51	0.79		
	年に13回以上	25	4.96	0.20		
	合計	95	4.46	0.82		
⑦勤務校で話が出来ない相談をすることが出来た	数年に1回程度～年3回程度	25	3.68	1.11	*	0.086
	年に4回～12回程度	45	4.16	1.11		
	年に13回以上	25	4.56	0.92		
	合計	95	4.14	1.10		
⑧参加することによって気分転換となった	数年に1回程度～年3回程度	25	4.08	0.81	**	0.142
	年に4回～12回程度	45	4.42	0.78		
	年に13回以上	23	4.87	0.34		
	合計	93	4.44	0.76		

*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05.

「まったくあてはまらない」=1 ～「とてもあてはまる」=5で配点。

続いて参加頻度による違いをみてる（表 5）。一元配置分散分析の結果、④⑥⑦⑧の項目において統計的な有意差があった。いずれも参加頻度が高いと平均値が高い結果になっていた。それぞれの項目についてみると、「④特別活動の実践に関する悩みを聞いてもらえた」というように特別活動の実践に直接関係する項目において、参加頻度が高い者はそうではない者と比べて特別活動の学習会に高い効用を得ていることが確認される。

だが⑥⑦⑧は直接的に特別活動に関する効用を示す項目ではない。たとえば「⑥特別活動に限らず、教職生活に関わることで話をする事が出来る教師と出会えた」は特別活動に限定されないコミュニケーションが可能な教師同士の関係形成、すなわち教師ネットワーク形成の機会として特別活動の学習会が機能していることを示す項目である。それが参加頻度による違いが確認されると同時に、効果量の値も比較的、大きなものであった（ $\eta^2=0.232$ ）。特別活動の学習会はネットワーク形成をする上で何かしらの役割を有しており、さらにそこで形成されたネットワークを維持するために、一部の教師が頻繁に参加しているのかもしれない。

4 特別活動の学習会に参加経験者の教師ネットワーク（相談相手）

特別活動の学習会が教師同士の関係形成や維持において一定の機能を有していることが示唆された。では特別活動の学習会に参加経験者は具体的にどのような教師ネットワークを有しているのだろうか。ここでは「相談相手」という点から、教師ネットワークの実態を検討した。

表 6 は特別活動の学習会に参加経験者の相談相手に関する結果である。左表が特別活動に関する相談相手、右表が仕事に関する相談相手である。ウェブ調査では、特別活動ならびに仕事の相談相手として、それぞれ①から⑦の相手にどの程度の頻度で相談しているのか、「全く相談しない」から「よく相談する」の 4 件法で回答を求めた。

表 6 特別活動の学習会に参加経験者の相談相手（平均値と標準偏差）

特別活動に関する相談相手	Mean	SD	仕事に関する相談相手	Mean	SD
① 現在の勤務校で同僚の先生	2.49	0.93	① 現在の勤務校で同僚の先生	3.21	0.86
② 以前、勤務校で同僚だった先生	2.24	1.10	② 以前、勤務校で同僚だった先生	2.52	1.13
③ 特別活動の学習会に参加している先生	3.17	1.03	③ 特別活動の学習会に参加している先生	2.69	1.00
④ 大学の研究者	2.00	1.17	④ 大学の研究者	1.75	0.99
⑤ 友人	2.16	1.11	⑤ 友人	2.29	1.16
⑥ 家族	1.67	0.94	⑥ 家族	2.30	1.14
⑦ ①から⑥以外の人	1.24	0.68	⑦ ①から⑥以外の人	1.17	0.59
「全く相談しない」=1～「よく相談する」=4で配点			「全く相談しない」=1～「よく相談する」=4で配点		

特別活動に関する相談相手の結果（表 6 の左表）をみてみよう。平均値が最も高い項目は「③特別活動の学習会に参加している先生」で平均値が 3.17 であった。教師にとって特別活動は、勤務校で行われるカリキュラム・教育実践であり、協働して実践していくのは勤務校の同僚である。ところが特別活動の学習会参加経験者は、特別活動の実践について何か相談したいことがあった場合は、高い頻度で勤務校外において実施される学習会に参加している教師に相談を行っていたのである。次いで平均値が高かったのは「①現在の勤務校で同僚の先生」（平均値 2.49）、「②以前、勤務校で同僚だった先生」（平均値 2.24）となっていた。現在過去問わず勤務校の同僚教師が相談相手となっていた。

続いて仕事に関する相談相手の結果（表 6 の右表）をみたい。仕事の場合は、「①現在の勤務校で同僚の先生」（平均値 3.21）の平均値が最も高かった。ところがそれについて平均値が高かったのは「③特別活動の学習会に参加している先生」（平均値 2.69）であった。先ほど、特別活動の学習会参加経験の効用の結果において、特別活動の学習会が教師ネットワークの形成において何かしらの機能を有している可能性があることを指摘したが、「相談相手」からみた教師ネットワークという点において、学習会が特別活動のことに留まらず仕事全般の相談をすることが出来る教師とのネットワーク形成の場となっていることが示唆された。

また参加頻度別にみた特別活動に関する相談相手の違いを検討するために、参加頻度を独立変数、特別活動に関する相談頻度を従属変数とした一元配置分散分析を行った。紙幅の都合上、分析結果の概要のみ述べておきたい。統計的に有意な差があったのは、「③特別活動の学習会に参加している先生」（ $p<0.01$ ）「④大学の研究者」（ $p<0.001$ ）であった。参加頻度が高い者は参加頻度が低い者に比べて、特別活動の学習会に参加している先生や大学の研究者に対して、特別活動の相談をする傾向にあった。

さらに参加頻度を独立変数、仕事に関する相談頻度を従属変数とした一元配置分散分析も行った。これについても同じく紙幅の都合上、分析結果の概要のみ述べておきたい。特別活動同様、統計的に有意な差があったのは、「③特別活動の学習会に参加している先生」「④大学の研究者」（いずれも $p<0.001$ ）であった。いずれも学習会参加頻度が高い教師がそうではない教師と比べて、特別活動に限らず仕事に関しても特別活動の学習会に参加している先生や大学の研究者に頻繁に相談を行っていた。

5 特別活動の学習会への参加と教職生活

最後に特別活動の学習会への参加と教職生活の関連をあきらかにするため、特別活動の学習会の参加頻度によって、教職生活に違いがあるのか検討した。具体的には学習会参加頻度を独立変数、教職生活の各項目を従属変数とした一元配置分散分析を行った。

分析結果を示したものが表 7 である。なお教職生活についてウェブ調査では、「あなたの教職生活全般について、次の項目はどの程度あてはまりますか？」という質問に対し、表 7 にある①から⑫それぞれについて「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。

表 7 をみてみると、「①仕事が多忙である」「②仕事でストレスを感じる」「④子どもとのふれあいに喜びを感じる」「⑤教師として成長している実感がある」「⑧教師を辞めたいと考えることがある」「⑫教師になってよかったと思っている」において統計的な有意差があった。昨今、教師の多忙化等が社会問題化されているが、特別活動の学習会に頻繁に参加している教師はそうではない教師と比べて、「①仕事が多忙である」「②仕事でストレスを感じる」「⑧教師を辞めたいと考えることがある」の平均値が低かった。すなわち、学習会に頻繁に参加している教師は、そうではない教師と比べて「多忙とっていない」「ストレスを感じていない」仕事を辞めたいと考えていない」と考えている傾向にあった。

さらに学習会に頻繁に参加している教師は、「成長している実感あり」「教師になってよかったと思っている」傾向にあった。これらの結果は、頻繁に参加する小学校教師にとって特別活動の学習会への参加は、教職生活の充実に関連があることが示唆された。

表 7 参加頻度別にみた教職生活（一元配置分散分析の結果）

		N	Mean	SD	p	η^2
①仕事が多忙である	数年に1回程度～年3回程度	25	4.60	0.58	**	0.121
	年に4回～12回程度	45	4.47	0.69		
	年に13回以上	25	3.88	1.05		
	合計	95	4.35	0.82		
②仕事でストレスを感じる	数年に1回程度～年3回程度	25	4.08	0.95	**	0.120
	年に4回～12回程度	45	3.98	0.94		
	年に13回以上	25	3.20	1.12		
	合計	95	3.80	1.05		
③仕事に意欲を感じられない	数年に1回程度～年3回程度	25	2.40	0.82		0.049
	年に4回～12回程度	45	2.02	1.01		
	年に13回以上	25	1.84	0.90		
	合計	95	2.07	0.95		
④子どもとのふれあいに喜びを感じる	数年に1回程度～年3回程度	25	4.32	0.90	*	0.070
	年に4回～12回程度	45	4.56	0.59		
	年に13回以上	25	4.80	0.41		
	合計	95	4.56	0.66		
⑤教師として成長している実感がある	数年に1回程度～年3回程度	25	3.96	0.84	**	0.109
	年に4回～12回程度	45	4.07	0.89		
	年に13回以上	25	4.64	0.49		
	合計	95	4.19	0.83		
⑥子どもの考えていることを理解できないことがある	数年に1回程度～年3回程度	25	3.44	0.77		0.046
	年に4回～12回程度	45	3.18	0.89		
	年に13回以上	25	2.92	0.95		
	合計	95	3.18	0.89		
⑦自由に仕事が出来ないと考えることがある	数年に1回程度～年3回程度	25	3.32	1.18		0.023
	年に4回～12回程度	45	3.42	1.12		
	年に13回以上	25	3.00	1.23		
	合計	95	3.28	1.16		
⑧教師を辞めたいと考えることがある	数年に1回程度～年3回程度	25	3.12	1.17	*	0.064
	年に4回～12回程度	45	2.62	1.35		
	年に13回以上	25	2.24	1.13		
	合計	95	2.65	1.28		
⑨家に帰っても学校のことを考えている	数年に1回程度～年3回程度	25	3.96	0.98		0.006
	年に4回～12回程度	45	4.11	1.09		
	年に13回以上	25	3.96	0.84		
	合計	95	4.03	0.99		
⑩現在の勤務校の同僚との関係は良好だ	数年に1回程度～年3回程度	25	4.28	0.61		0.016
	年に4回～12回程度	45	4.07	0.92		
	年に13回以上	25	4.24	0.66		
	合計	95	4.17	0.78		
⑪教師として成長するための学習機会を得たいと思っている	数年に1回程度～年3回程度	25	4.44	0.58		0.023
	年に4回～12回程度	45	4.60	0.62		
	年に13回以上	25	4.68	0.56		
	合計	95	4.58	0.59		
⑫教師になってよかったと思っている	数年に1回程度～年3回程度	24	4.25	0.68	*	0.072
	年に4回～12回程度	45	4.49	0.66		
	年に13回以上	25	4.72	0.46		
	合計	94	4.49	0.64		

*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05.

「まったくあてはまらない」=1 ～「とてもあてはまる」=5で配点。

IV 考察

1 教職生活における特別活動の学習会の意義と課題

本稿は、特別活動の学習会に関するウェブ調査の調査データを用いて分析を行った。特別活動の学習会に参加した経験のある小学校教師の属性、参加頻度、効用、教師ネットワーク（相談相手）、特別活動の学習会への参加と教職生活に関する分析結果を踏まえ、教職生活における特別活動の学習会の意義と課題について考察する。

まずは学習会の意義についてである。分析結果から、学習会の効用として特別活動に関する実践知獲得をあげている参加経験者が多かった。これは特別活動の学習会には、自主的な研修として教師の職能開発の機会となる、という意義があることを示唆される結果であった。

だが学習会の意義はこのことに限定されない。勤務時間外の学習会は、教師ネットワークの獲得の機会という意義が今回の結果から明らかにされた。相談相手の結果より、仕事の相談は同僚（勤務校の教師）を中心に行うが、特別活動の相談は学習会参加者メンバー（主に勤務校以外の教師）に行っていた。今回の結果からは、特別活動の学習会に参加することが勤務校以外に存在する特別活動に関する教師ネットワーク参入機会となっていることが示唆された。このことは、教師対象のインタビュー調査から地域の特別活動に関する教育研究団体への参加が、特別活動の教師ネットワークの拡大に寄与していることを示唆する結果を示した長谷川・藤村（2023）と類似した結果であった。

さらに、教職生活に対する満足感が高い傾向にあった。昨今の教育政策は、働き方改革を中心にして学校改善を通じて、教職に対する意欲を高めようとしている。他方、今回取り上げた特別活動の学習会は勤務時間外に開催されるものであり、無償労働の時間を費やして参加するものとみなすことも出来るだろう。それに関わらず頻繁に参加する者にとって特別活動の学習会は、自身の教職生活全般を充実させる機会となっていたのである。このこともまた学習会の意義の1つとしてあげられるものである。

ただし学習会には次のような課題もあった。学校基本調査や学校教員統計調査などの結果と比べてみたとき、学習会参加経験においてジェンダー格差が存在していた。具体的には小学校教師全般の男女比より、学習会参加経験者に占める女性教師の参加割合は低く、さらには参加経験者の中でも女性は男性と比べて参加頻度が低い傾向にあった。女性教師は勤務時間外の学習会への参加機会が制限されている可能性が示唆される。この背景には家庭との両立等の問題があるだろう。ただし、近年の教師研究では、家庭との両立等とは別に、一見ジェンダー中立的に見える「教育改革」においても女性教師に不平等をもたらしていることが指摘されている（佐藤 2021）。「教育改革」ではないが、教師がインフォーマルに開催する自主的な学習会においても、女性参加を制限する教師文化が存在しているのかもしれない。

なお、今回の調査データは、「Ⅱ 方法」において述べたとおり、特別活動に関する学習会に参加した経験のある小学校教師に限定した調査データであり、またサンプルサイズも決して大きなものではなかった。量的調査データの課題を踏まえると、今後、学習会参加経験が無い教師も対象にした調査の実施分析を踏まえ、改めて教職生活における特別活動の学習会の意義と課題を考察する必要がある。

2 今後の研究可能性

最後に、小学校特別活動の学習会を対象とした研究に関する調査分析において今後、着目すべき点について考察したい。本稿を通して得られた知見を踏まえると、次の3つに着目した研究可能性を見出すことができる。

第1は、学習会の内部過程への着目である。本稿では、特別活動の学習会に参加した経験のある小学校教師を対象を絞る量的分析を試みることで、先行研究では等閑視されてきた「小学校特別活動の学習会」の実態の一端を明らかにすることができた。この知見をさらに深めるためには、学習会において「何が行われているのか」という内部過程の素描や「いかなる目的で作られ、どのように広がっていったのか」という学習会の設立前後のプロセスを動的に捉えるアプローチが必要となる。具体的には、学習会に関する資料収集や調査対象の学習会への参与観察に基づく分析が求められる。とりわけ、他のカリキュラムと比べて教員研修の対象と見なされていない特別活動の学習会の実態把握を行う調査研究は、教員研修の在り方を問い直すための貴重なエビデンスにもなるだろう。

第2は、学習会を基点とした教師ネットワークへの着目である。今回のウェブ調査分析を通して、特別活動の学習会が、単なる実践知の学習機会だけでなく特別活動というカリキュラムに関心を持つ教師同士のネットワーク形成の機会となっていることが示唆された。とくに、仕事の相談は同僚（勤務校の教師）を中心に行うが、特別活動の相談は学習会参加者メンバー（主に勤務校以外の教師）に行っているという結果は、特別活動に取り組もうとする教師が置かれた状況と学校外のネットワーク、すなわち学習会を基点とした教師間のつながりの重要性を物語っている。また、参加頻度や教員経験年数の違い、県外からの参加などを踏まえると、県内外の教師ネットワークのハブとして機能している者の存在や特別活動の理念・実践を若手教師や無関心層へと広げていこうとする動きなど、学習会における多層的な相互交流や役割がみられる可能性もある。この点については、長谷川・藤村（2023）において試行的に取り組んできたが、本稿の知見を踏まえてより詳細な調査分析へと発展することができる。

第3は、個々の教師による学習会の経験・意味づけへの着目である。教師たちは、多忙化が進行する中で勤務時間外に開催される特別活動の学習会になぜ参加するのか。この問いを明らかにするためには、個々の教師の語りやストーリーに耳を傾けることも不可欠である。具体的には、学習会への参加頻度が高い小学校教師へのインタビュー調査が挙げられる。学習会の参加と対象者の教職生活とがどのように結びつけられているのかに着目することで、勤務校内で十分に特別活動に関する学習をすることが出来ない状況を学習会への参加によっていかに乗り越えていったのかというプロセスや、プライベートな時間を費やして学習することがいかに語られるのか、といった個々の教師による学習会の意義を多角的に明らかにすることができる。また注目すべきなのは、学習会の参加経験者の構成においてジェンダー格差が存在するという本稿の調査結果である。女性教師を対象としたインタビュー調査を試みることで、勤務時間外の学習会への参加機会が制限されている学校現場の構造的要因を顕在化したり、小学校特別活動の学習会の特徴をより明確化したりすることが可能となる。

今後は質的調査の方法も用いながら上記の点を明らかにしていくことで、本稿における量的調査の対象や分析結果の理解促進につながり、校内研修に限定されない多元化された特別活動に関する学習会の意味と課題をより詳細に明らかにすることができるだろう。これらについては、今後の研究課題として別稿にて論じる予定である。

謝辞・付記

本研究はJSPS 科研費 JP22K02605 の助成を受けたものである。

本稿は日本教育社会学会第 76 回大会における自由研究発表「教師ネットワークと勤務時間外で行われる学習会 ―小学校特別活動を事例に―」(2024 年 9 月 13 日・信州大学)のうち、特別活動の学習会に関するウェブ調査の結果を中心に、内容を大幅に再構成し、タイトルを修正した上で改めて執筆したものである。本稿はⅠからⅢ、Ⅳ1 を長谷川、Ⅳ2 を藤村が分担執筆し、2 名が協議の上、作成した。

注

- 1) 本稿は勤務時間外の教師たちの様子に着目するものである。すなわちそれは、教育職員(教員)として従事すべき業務の範疇を超えて取り組んでいる様々な活動に本稿は関心を向けているということである。「教師」は教える人のことを意味する普通名詞、「教員」は法律で定義された用語で、「教育職員」の略称であると定義されている(佐久間 2019)。このような定義と今回の研究関心を踏まえ、本稿では幅広く教える人と定義される「教師」という用語を原則用いることとした。ただし教員研修など明確に定義された用語の場合は、教師ではなく教員を用いることとした。また後ほど取り上げるウェブ調査では、教員経験年数(学校の教員になって何年目か)など、回答しやすさを考慮して、教師ではなく教員と表現したものもある。
- 2) 国や教育委員会が実施主体の教員研修については、文部科学省(2024a,2024b)を参考にした。
- 3) 本稿では教師による自主的な研修に関する会を、研修会でなく、学習会と表記している。その理由は、特別活動に関する自主的な研修に関する会の名称は必ずしも「研修」という用語が使われていないことに加え、国や教育委員会等が行う研修会と区別するためである。
- 4) 具体的には、OECD 国際教員指導環境調査(TALIS) 2018 教員質問紙小学校(日本語版)における「問 13 あなたが受けた公的な教育や研修には、以下の教科等が含まれていましたか。また、今年度あなたは以下の教科等をこの小学校で教えていますか。(1)~(12)のそれぞれについて、当てはまるもの全てに○を付けてください。」の選択肢(1)~(12)は「(1)国語、(2)算数、(3)理科、(4)社会、(5)外国語、(6)音楽・図画工作、(7)体育、(8)道徳、(9)家庭、(10)総合的な学習の時間、(11)生活、(12)その他」であった。この選択肢から分かるとおり、特別活動は学習指導要領に定められている教育活動であるにも関わらず、選択肢の設定がなされていなかった。仮に特別活動に関する研修を受講したとするならば、「(12)その他」を選択することとなるだろう。
- 5) 今回、分析で用いるウェブ調査では回答者に対して居住地方をたずねた。その結果、分析対象者 95 名のうち、九州地方(沖縄含む)が 48 名で全体の 50.5%、中国地方が 24 名で全体の 25.3%、近畿地方が 2 名で 2.1%、関東地方が 21 名で 22.1%であった。このことから分析対象者の居住地方は西日本が中心となった。
- 6) 令和 5 年度(2023 年度)学校基本調査の小学校「職名別教員数(本務者)」の集計数値を基に算出した。なおデータは「政府統計の総合窓口 e-Stat」(<https://www.e-stat.go.jp/>)よ

- り 2024 年 11 月 14 日に入手した。
- 7) 令和 4 年度（2022 年度）学校教員統計調査の「小学校勤務年数区分別職名別教員構成」の集計数値を基に算出した。なおデータは「政府統計の総合窓口 e-Stat」(<https://www.e-stat.go.jp/>) より 2024 年 11 月 14 日に入手した。
 - 8) 性別同様、令和 5 年度（2023 年度）学校基本調査の小学校「職名別教員数（本務者）」の集計数値を基に算出した。なおデータは「政府統計の総合窓口 e-Stat」(<https://www.e-stat.go.jp/>) より 2024 年 11 月 14 日に入手した。

引用・参考文献

- 長谷川祐介・藤村晃成, 2023, 「特別活動の教師ネットワークに関する調査可能性を探るー方法論の検討と試行的調査を通じてー」『大分大学教育学部研究紀要』第 45 巻第 1 号, pp.37-48.
- 国立教育政策研究所編, 2019, 『教員環境の国際比較 OECD 国際教員指導環境調査 (TALIS) 2018 調査報告書ー学び続ける教員と校長ー』ぎょうせい。
- 黒田友紀, 2019, 「学び続ける教師ー教員研修の意義と課題ー」佐久間亜紀・佐伯胖編著『現代の教師論』ミネルヴァ書房, pp.123-138.
- 文部科学省, 2024a, 「教員研修」, 文部科学省ホームページ, (2024 年 9 月 5 日取得, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kenshu/index.htm).
- 文部科学省, 2024b, 「教員研修の実施体系」, 文部科学省ホームページ, (2024 年 9 月 5 日取得, https://www.mext.go.jp/content/20230328_mxt-kyoikujinzai01_100002375-1.pdf).
- 日本教育方法学会編, 2009, 『日本の授業研究ーLesson Study in Japanー 授業研究の歴史と教師教育 <上巻>』学文社。
- 佐久間亜紀, 2019, 「教師を目指す」佐久間亜紀・佐伯胖編著『現代の教師論』ミネルヴァ書房, pp.1-13.
- 佐藤学, 1997, 『教師というアポリアー反省的实践へー』世織書房。
- 佐藤隆, 2005, 「教師の成長と民間教育研究運動」『日本教師教育学会年報』第 14 号, pp.41-47.
- 佐藤智美, 2021, 「なぜ、学校女性管理職比率は停滞・低下しているのかー小学校女性教員のライフヒストリーに注目してー」『教育社会学研究』第 108 集, pp.185-206.

Significance and Problems of Voluntary Learning Assemblies
by Elementary School Teachers
–Examination of Web Survey on Voluntary Learning Meetings
by Elementary School Teachers for Extracurricular Activities (*Tokubetsu Katsudo*)–

Yusuke HASEGAWA Kosei FUJIMURA

Abstract

To clarify one aspect of Japanese teacher culture, it is important to conduct research on voluntary learning assemblies organized by teachers held outside of working hours, which are considered a form of teacher training. Therefore, we analyzed the data from a web survey on learning assemblies for extracurricular activities (*Tokubetsu Katsudo*) conducted among elementary school teachers who have participated in learning assemblies for extracurricular activities (*Tokubetsu Katsudo*). The analysis revealed that teachers' voluntary learning assemblies on extracurricular activities (*Tokubetsu Katsudo*) at elementary schools are not only an opportunity for professional development for teachers, but also an opportunity to join a teacher network related to extracurricular activities (*Tokubetsu Katsudo*), and for those who participate frequently, an opportunity to enrich their own professional life in general. However, the results also suggested that there is a teacher culture that restricts the participation of women as an issue with voluntary learning assemblies. As possibilities for future research, we discussed three points: research focusing on the internal process of learning assemblies, teacher networks based on voluntary learning assemblies, and the experiences and meanings of individual teachers.

Key words : Teacher Training, Voluntary Learning Assemblies, Extracurricular Activities (*Tokubetsu Katsudo*)